



一般社団法人 **日本LD学会**
Japan Academy of Learning Disabilities

会 報 第120号

一般社団法人 日本LD学会 事務局（業務委託先）

〒162-0801 東京都新宿区山吹町358-5 アカデミーセンター（株）国際文献社

URL <https://www.jald.or.jp>

- ・巻頭言：「令和の日本型学校教育」と特別支援教育
- ・第5回研究集会（熊本）開催報告
- ・〈連続講座〉新学習指導要領時代における学びの多様性を生かすための一貫した支援
- ・〈連続講座〉日本LD学会研究委員会
- ・委員会リレー企画 編集委員会紹介
- ・PATIO～実践の最前線～



「令和の日本型学校教育」と特別支援教育

明星大学

小 貫 悟

令和3年1月に中教審によって発信された令和時代の学校教育の在り様の柱は「〈個別最適な学び〉と〈協働的な学び〉の一体的な充実」である。つまり、これが公教育の将来構想イメージでもある。

そして、その発信内容は、

多様な子供たちを誰一人取り残すことなく育成する「個別最適な学び」と、子供たちの多様な個性を最大限に生かす「協働的な学び」の一体的な充実が図られることが求められる。

である。

私は、ここにある文言に初めて触れたとき「特別支援教育」を語っているのではないかと錯覚した。おそらく通常の学級を念頭においた公教育の教育観が特別支援教育における感覚に近づいてきているようである。

それにしても、特別支援教育に長く携わってきた人間にとって夢のようなこの発想には、「果たして実現可能なのだろうか？」と、余計な疑いも持ってしまう。学校現場では「このような理想は

あってほしいけど、現実にはその絵を思い浮かべることが難しい」との声も聞く。しかし、一方で、そう発言している教師自身も、一私人として我が子のことになれば「個別最適な学び」を強く求めたい様子なのである。つまり、学校に通う子を持つすべての保護者の中で「個別最適な学び」を求めない人はいないわけだ。現行の学習指導要領のキー概念の「主体的、対話的で深い学び」のフレーズに心躍らなかった国民も、おそらく「個別最適な学び」には多少なりの関心を向けてしまうのかもしれない。それだけ多くの国民が望むものが、教育現場単独の技術的な不安感だけで、しぼんでいくとは到底思えない。この未来イメージは信じてみても良さそうな気になる。

そもそも「〈個別最適な学び〉と〈協働的な学び〉の一体的な充実」とは、特別支援教育で追及してきた「合理的配慮」の視点そのものである。ここに「〈通常の学級における教育〉と〈特別支援教育〉の一体的な充実」の未来を重ね夢想するのは、私だけであろうか。